



すると、温かい風が吹いてきた。

風を辿って歩いてみると、ちゃぷちゃぷと水音がしてきた。おまけに、湯気まで漂ってくる。これはもしや——と足早になってみると、想像通りのものがあつた。

「やっぱり温泉だ。アルプスにもあるとは聞いていたけど……ローマ以来だなあ……」  
 試しに腕を入れてみると程々に温かい。外気温が低いので、湯気は凄いが、熱くはない。「入っちゃおっかな……。あれ、じゃあ、さっきのちゃぷちゃぷという水音は？」

その時、突然、温泉の水面が膨れ上がった。

潜っていた人間が立ち上がったのだのと気付くまで、数秒が必要だった。ユリアヌスの頭がいきなりの事に追いつかなかつたのだ。

現れたのは——**全裸の少女だった。**

若々しく瑞々しい白皙の肌、しっとり濡れた金色の髪。引き締まった瘦身に、しなやかに伸びる腕と長く柔らかな線を描く脚。こちらは腰を落としていたので、少女の膨らみきらない乳房——だが、腰のくびれが膨らみを強調しているので、小さくも見えない双丘——を下から見上げる形になっていた。

ちなみにその頂点にある薄紅色は生意気そうに尖がっている。

余りの美しさに思わず見とれて、ぼーっとしてしまう。

まるでギリシャ神話のような展開だ。ただし、水浴びではなく、湯浴みなのは、ローマ風と言えなくもない。そのせいか、ユリアヌスの口からはラテン語がこぼれる。

「……パークス。スィー・ウイス・パークム、パラ・ベツルム……」

すると少女がこちらに目を向ける。

大きく円らだが鋭い緑の瞳が、彫り深い顔立ちの中でも輝いていた。

全体としては整っているが、それ以上に生フネウマ気に満ちている。凜とした風貌だった。

それが自分を見下ろしている。あるいは見下している。

悪い事をしたかも——とユリアヌスはたじろいだ。

彼女が敬虔なキリスト教徒なら、裸身を見られる事を嫌がるかもしれない。

だが、少女が恥じらう事はなかった。大股でじゃぶじゃぶと水をかきわけて歩く。

胸元も股間も隠していない。

そして、そのまま、ユリアヌスの横を通り過ぎる。美しい尻と乙女の温もりに、胸が高鳴る。

「ΑΥ. Δεν ειναί πρόθυμος να κρυφοκοιτάξει σε μένα (あの、僕は覗く気はなくて……)」

と弁解しかけ、ユリアヌスは自分がギリシャ語で話している事に気付いた。ここはガリア(現フランス)ということ忘れていた。慌てて頭をラテン語に切り替える。

「ごめん。実は道に迷って……」

だが、少女は黙って草叢から、鉄器を拾い上げた。それは決して長くはないが、肉厚幅広の両刃で——というか、あれはローマ軍で制式採用されている【剛剣】<sup>グラディウス</sup>ではないのか？  
そして、少女は一糸纏わぬまま、剛剣を大きく振りかぶる。

「へ？」

少女が腕を振り降ろすと、剛剣がまっすぐ飛んでくる。

投擲された剛剣はユリアヌスの頬をかすめ——というか、少しばかり肉をちょん切って——後方へとすっ飛んで行った。

「ちっ……」

少女は舌打ちした。

外したか——という内心が滲み出る様な舌打ちだった。

勿論、ユリアヌスは全力で逃げ出した。

しばらく山林を駆け抜けた後、ユリアヌスは独白する。

「は、裸を見られただけで、殺人未遂とは……！ ガリアは荒っぽいと聞いていたが、まさかここまでとは……！！」

そこで、息が切れ切れになって、足がもつれる。未だに慣れない紅の外套に右足が絡まる。結果、ユリアヌスはすってんころりん、思いつき顔を地面にぶつけた。

だから、独り言などしなければいいのに——と余人なら、呆れるだろう。が、ユリアヌスは孤独な少年だった。今でも友達いない青年だ。ぼっち系の二十四歳である。よって、独り言は中々やめられない。

「それに、これだけ逃げれば……」

と再び独白し掛けて、壮絶に嫌な予感がした。

ゆっくりと後ろを振り返る。

少女は追いかけてきた。しかも**全裸で、剛剣だけを握って**。

慌てたユリアヌスは再び駆け出す。今度ばかりは独り言の余裕もない。

——ど、どうなっている？

ユリアヌスは少女の目的を『覗き野郎を追い払う』だと思っていた。だから、一度足を止めたのだ。だが、どうやら少女の目的は『覗き野郎をぶっ殺す』だったらしい。信じられない。覗いたのは不慮の事故だし、ちゃんと謝罪もしている。それでも少女はユリアヌスの息の根を止めたらしい。

しかも……

——お、追いつかれる……！

少女は引き縮まった瘦身（全裸だからよくわかる）に相応しい俊足だった。冗談抜きで羚羊のような美脚が凄まじい躍動をしていた。

対するユリアヌスは元々運動不足の哲学青年である。足の速さはせいぜいが人並みである。おまけに全裸の少女に対し、ユリアヌスは甲冑を帯びている。徒競争で勝てるはずがない。では徒競争以外では？　こちらは武装した男性で、あちらは全裸の少女だ。取っ組み合いになれば……。

——勝てるわけない……！

何しろ、相手は剛剣をあれだけ正確に投擲できるのだ。結局、致命傷には至らなかったとはいえ、そもそも剛剣は投擲に向かない。そんな剛剣を投擲し命中させた。この一事を以って、その力量はわかる。

急に前方の視界が開けた。

崖<sup>がけ</sup>だ。

——しめた。

あの少女がいかに頑強と言えど、所詮は全裸だ。全裸で鬱蒼たるアルプスの山林を駆け抜ける時点で人外臭いが、しかし、全裸なのだ。

「ふっ。君はその柔肌で崖を転がり落ちれるかな？　だが、僕は甲冑を着込んでいるのだよ！　ふははははっ！　ではさらばだ……！」

ユリアヌスはぼっち系得意の一人芝居をし、「とうっ！」と、その崖に転がり落ちた。

ただ若干、崖の勾配が激しく、転がり落ちるのではなく、飛び降りる形になったのは想定外だった。

\*\*\*

全裸の少女はラテン語で呟いた。

「あいつ……馬鹿か？」

\*\*\*

「ううう、死ぬかと思った。というか、死ぬところだった」

ユリアヌスは全身打撲でズタボロ、しかも、水に濡れた衣服でガタガタ震えつつ、独白した。「でも、下が川で本当に助かった」

実際、僥倖<sup>うまいちよき</sup>だった。

水量が衝撃を和らげ、さらに隠れ蓑になってくれただけではない。水の流れる川がある以上、

下れば、大概、海に出る。そこまでいなくても、大河や大湖に繋がっている可能性も高い。いかにアルプスと言えど、大河や大湖には人の手が入っている。そこまで辿りつけば、ローマ街道やローマ軍団を見つける事は難しくない。

そう考えて、川沿いに山を下ったユリアヌスは、意外にあっさりと簡単にローマ軍団を——さらに知り合いの顔を見つける事が出来た。

五十代の元財務官僚サルステイウスだ。

「おい、サルステイウス殿く」

「おお、ユリアヌス様っ！ ご無事でしたかっ？」

「うんっ！」

そして、ユリアヌスはサルステイウスに駆け寄り、さらに飛び付き、そのまま抱きつく。

さすがにサルステイウスも困った顔をしたものの、ユリアヌスの抱擁を拒もうとはしない。それだけで頬が緩む。甘えているという自覚はある。しかし、ユリアヌスはこの初老の男性を

父のように慕っていた。できれば、一方通行の感情ではなく、サルステイウスも自分を息子のように思ってくれると嬉しいのだが……。

「ユ、ユリアヌス様、そろそろ……。人目もありますので……」

と、諫言されれば、「ん。ああ、そうだね……」と離れるしかない。

ユリアヌスが名残惜しんでいると、サルステイウスは早速状況を説明してくれた。聞けば、サルステイウスもユリアヌスとはぐれた後、ほぼ同じことを考えて、目ぼしい川を捜し回ったそうだ。

「あなたが山を登ろうとしないでいてくれる事だけを願っていました」

「ああ、それも思いついたんだけどね」

何故か、サルステイウスはぎょっとした顔になった。

『『山で遭難した時は下手に川を下らない方がいい』って、聞いた事があってさ。滝があるかもしれないし、小川だと土の中に消えてしまうかもしれない。むしろ、山道は山の尾根に沿って作られている事が多いから、それを目指して……』

「ここはアルプスですよ！」

サルステイウスは大声で話を遮った。

「ローマやコンスタンティーノポリス周辺の小山ではないのです。尾根に登山道なんてある訳ないでしょう。あなたが尾根に辿り着けるわけがない。加えて、この規模の河なら、そんなに簡単に見失ったりしません！ いいですか、ここはガリア（現フランス）のアルプス——既に

【西方】<sup>オクシデント</sup>の中でも秘境と言える場所です。【東方】<sup>オリエンツ</sup>のような都会の発想は通用しないと思って下さい……！」

「は、はい……」

ユリアヌスはサルステイウスの気圧される形で頷いた。

実際のところ、ユリアヌスも最終的にサルステイウスと同じ結論に至っている。だからこそ、山を登らずに川を下ったのである。

だが、迷ったのは事実だ。対して、サルステイウスは即決したらしい。

これこそ経験の差だろう。相反する複数の原理が絡み合っている時、演繹で答えを導き出すのは困難であり、帰納で答えに辿り着く必要がある。そのためには机上の知識よりも、実際の経験が求められる。それがサルステイウスにはあつて、ユリアヌスにはないのだ。

ユリアヌスも机上の学問は得意だった。半年にも満たないが、訓練も受けている。圧倒的に不足しているのは『経験』なのだ。だから、その経験をこのサルステイウスに補ってもらえれば、実にありがたい。

——机上の空論では駄目だ……という事は机上で一杯勉強してきたからな。うんうん。

そして、同時にユリアヌスには書物好きで人間嫌いな酷薄さがあるから、

……このサルステイウスという男は信頼に足るな。

と冷たい判断をも下していた。

すると、サルステイウスはユリアヌスの頬の傷に目をやった。

「それにしてもどうしたのです。それは？」

「いやあそれが……いきなり【蛮人】<sup>バルバロス</sup>に襲われまして……」

「なんと……もしやゲルマンですか？」

「ゲルマン？……そう言えば、金髪でしたね。あれはゲルマンかもしれません」

「ああ、【蛮族】<sup>バルバロイ</sup>がこのアルプスにまで浸透しているとは……最早一刻の猶予もありませんな」

サルステイウスは嘆いた。

微妙な齟齬がある気はしたが、ユリアヌスは訂正しなかった。そりゃあそうだ。問答無用で襲いかかってくる少女は野蛮と呼ぶに相応しい。

……しかし、彼女は何者なのだろう？ 肌を見られて嫌がる。あるいは怒る——と言えば、キリスト教徒である。が、今考えてみれば、風呂嫌いのキリスト教徒が水浴びをするだろうか？ それにキリスト教徒は女性に貞淑を求める。まかりなりにも成人男性のユリアヌスを、年頃の少女が全裸で襲いかかる——というのはキリスト教徒に相応しいのだろうか？

「そうだ。今後は【衛士】<sup>リットル</sup>を付けましょう。二度とこんなことがないようせねばなりません。……トゥルート！」

「はっ」

と、一人の衛士がきびきび近づいてきた。

ユリアヌスはその姿に絶句する。

トゥルートと呼ばれた衛士は金髪白皙の細面で……。

有り体に言って、水浴びをしていた例の全裸少女にそっくりだった。

——というか、同一人物だよね？！

勿論、今の彼女（？）はローマ軍の正装で身を固め、長い金髪を後ろで束ねているが……。

——こ、これはいわゆる男装美少女？ 文学作品には時々出てくるけど……。

「あ、長髪が目障りでしょうか？」サルステイウスはまるで見当違いの返答を始める。「生憎、ガリアの伝統では男女ともに長髪なので……」

そこでトゥルートの方もユリアヌスに気付いたらしい。それまでの軍人然とした態度を崩し、「こ、こいつ……何者です？」

とこちらへいきなり指を差してきた。

……問われれば、答え得ねばなるまい。

「ええと、僕が【皇帝】です」

「はあ？」

トゥルートのこの態度にサルステイウスは目を覆う。

だが、ユリアヌスは苦笑するのみだった。勿論、組織の秩序を考えれば、笑い事ではない。しかし、苦笑するしかない。違和感しかないのは自分も同じなのだ。

だから、ユリアヌスはもう一度ゆっくりと繰り返す。

「ですから、僕が今度のローマ皇帝なんです」

\*\*\*

**ローマの平和**なる言葉がある。古代ローマ帝国がヨーロッパを支配し、後に『人類史上最も幸福な時代』と呼ばれた時代を指す。

再生なる言葉がある。中世ヨーロッパでは教会が権力を握り、人々は唯一絶対なる《神》に支配されていた。その中で古代ローマの消失技術と人類文明の尊厳を再生させた運動を指す。

例えば、ローマ街道は帝国崩壊以後も鉄道出現までは欧州最速の移動手段であった。

例えば、ローマ水道は建設以後二千年を経た現代でも人々の咽喉を潤し続けている。

このように偉大な文明が何百年もヨーロッパを支配し、その崩壊以後、千年もヨーロッパは同じ水準に到達する事すらできなかった。

だから、中世から現代にいたるまで、欧米諸国は『ローマの後継者』を自称したがる。その影響力が計り知れないからだ。

だから、ファンタジーでは『昔は今よりも技術も文明も進んだ偉大な帝国があった』と設定されるのだ。現実に中世初期の欧州では穴を掘って出てきた遺物の方が優れていたからだ。

しかし、時に西暦355年。この頃、既にローマ帝国の衰退は明らかだった。

最早、ローマ帝国に往年の力はない。実際、ローマ帝国はこの後しばらくして崩壊する。







こないようだ。なら、これは元学者志望の知性を見せつける好機である。

だから、教師の口調で滔々と説く。

「ローマも誕生した時には王国だったと言われています。つまり、王がいたのです。しかし、伝説や神話の域を出ません。そもそも王国と言いなながらも、王位が世襲されていませんし、選挙で選ばれていた形跡すらあります。元々ローマは開拓農民の集まりでしたから、その中の有力者が民衆の承認を得て、王を名乗っていたという事でしょう。要するに王と言っても、村長に箔を付けたただけだったのでしようね。しかし時代を下るとローマは王制をやめ、共和制へと移行します。そして、この頃から資料文献も充実し始め、まともな歴史になってきます。また、執政官や護民官、そして独裁官などの制度も整い始めます。とどのつまり、大雑把な慣習による取り決めで動いてきた開拓村落も、規模の拡大に伴い、システムティックな制度が必要になったという事でしょう。そして、そのシステムティックな制度の中では、【王】という曖昧な地位は許されなかったのでしょうか。この共和制はそれなりにうまく機能し、ローマはあの大国カタルゴや勇将ハンニバルをも打ち倒し、地中海世界の覇者となります。ですが、実際に地中海世界の覇者となつてから、共和制が機能不全に陥りました。後世の目で見れば、ローマは共和制で治めるには大きく成り過ぎたのでしょうか。ローマが開拓農民の集まりであった頃は、がむしろ最適かもしれません。ローマがイタリア半島を制覇した辺りでも、元老院主体の間接民主制でやっていきます。実際、その体制で、東はエジプト、西はブリタニア（現イギリス）やヒスパニア（現スペイン）まで、勢力を拡大するのですから。問題はその後です。エジプトやブリタニアもローマの一部になったとして、それが共和制で纏まるかという事です。勿論、無理でした。エジプト人がブリタニアの事情をも考慮して、政策決定に参加するなんて出来るわけがありません。その逆も然り。見た事も聞いた事もない異郷の事を鑑みるなど、出来るわけがないのです。地球の裏側の事情をも知ることができる通信技術があるならともかくね。結果、百年も内乱が続いた程です。この内乱を終息させかけたのが、あのガイウス・ユリウス・カエサルです。これが【皇帝】<sup>カエサル</sup>の由来ですね。つまり、村社会の原理だった共和制から、広大な領土統治に特化した皇帝専制へと移行すれば、抜本的な問題解決になる——かもしれないところ、カエサルは暗殺されます。そして、その後継者となったのが、カエサル家の養子になったオクタウィアヌスです。このオクタウィアヌスが内乱に終止符を打ち、

【ローマの平和】<sup>パクス・ローマーナ</sup>を取り戻した功績で与えられた称号が【尊厳者】<sup>アウグストゥス</sup>——これも【皇帝】<sup>アウグストゥス</sup>の由来になります。ただ、カエサルが元々家名であり、複数存在する事が前提になっているのに対し、アウグストゥスはあくまでも個人に与えられる称号なんです。また、アウグストゥスになる者はカエサル家の養子になるという手順も踏んでいます。だから、今のラテン語では、アウグストゥスには【第一皇帝】【正帝】という意味合いがあるのに対し、カエサルには【次期皇帝】【副帝】という意味合いがありますね。そして、僕はこの【カエサル（カイザー）】に相

当します。ああでも【統帥権】<sup>インペリウム</sup>を持つ【インペラトル（エンペラー）】でもありますよ」とユリアヌスは自慢げに話を結んだ。

これに対するトゥルートの反応は以下の通りだ。

「ウザい。キモい。オタク死ね」

「ええーっ！」

「説明が長いんだよ。もっと短くまとめねーの？」

「そ、そんな…： 概論は得意だったのに…：皆にも『そのまま教科書にできる出来だね』って褒められていたのに…：」

「それ皮肉じゃねーの？」

「ち、ちちちち違うよ。これでもぼぼぼぼくは…：」

「で、要するにお前は偉いの？ 偉くないの？」

「…：このローマ世界では二番目に偉い…：はず」

「皇帝なのに二番目？」

「だから…：そもそもローマに皇帝という職業は…：」

「それはもういい。とにかく皇帝って、偉いんだろ？ 一番だろうが二番だろうが、その辺の將軍よりもずっと偉いんだろ？」

「うん」

それがわかったのに何で君は僕を敬わないの？——と言いたがったが、ユリアヌスは言葉を控えた。相手は短気で、二人の距離は近く、何よりトゥルートの手には【儀鉞】<sup>ファスケス</sup>があり、その刃は黒光りしている。

「偉いんなら、メディオラム（現ミラノ）にでもいけばいいじゃん。ここだって、ルグドゥム（現リヨン）ほどじゃないけど、もう安全じゃないんだし。つか、何で冬にアルプス越えしようとした？ いくら街道沿いでも、せめて春まで待ってろよ。そうすりゃ…：」

あんな目に会う事もなかったろうに——とトゥルートは仄めかす。

対するユリアヌスは感心した。どうやら、無学だが聡明な少女（？）らしい。皇帝のなんたるかも知らない癖に、季節と地勢から瞬時に危険を見抜いたのである。

とはいえ、既に繰り返された質問だ。

ユリアヌスの返答も決まっている。

「僕は戦うために皇帝になったようなものだからね」

「おまえが？」 トゥルートは露骨に鼻で笑った。「失礼ですが、皇帝陛下は戦場について、どの程度ご存じで？」

「とりあえず【ガリア戦記】を読んできた」ユリアヌスの心に興奮が甦る。「いやあ、素晴らしかった。簡潔な表現、明晰な論理、まさに千年の名著だね」

「…：」

トゥルートルは眉を顰めた。ちなみに件の【ガリア戦記】は千年どころか、二千年後まで読まれるのだが、トゥルートルが聞きたいのはそういう事ではないらしい。

「……で、実戦経験は？」

「……」ユリアヌスは黙って目を逸らした。

「じゃあ、喧嘩は？ なよなよしているけど、お前だって男だよな。一人前の男なら、喧嘩の一つや二つはした事があるよな？」

「……昔、本屋に行ったら、柄の悪い人たちに囲まれて、金を寄せと……」

「なるほど、恐喝かつあげに会ったと……で？」

「ボコボコにされて、泣いていたら兄さんが助けに来てくれて……」

「……そんなお前が戦場で指揮を執るの？ 正気なの？」

「……だから、サルステイウス殿は君を僕の【衛士リクトル】にしたんだよ。多分」

現代的な感覚に直せば、新米少尉と先任軍曹といったところか。ただし、ユリアヌスは新米少尉よりもずっと酷い。新米少尉とは実戦経験がないだけで、士官学校で選別と教育を受けているものだ。座学は勿論、脱水症状で気絶するまで走り込みをやらされたりするのが普通で、知識や体力の面では一定の期待はできるのだが……。

「それより君……」

そこでユリアヌスは言い淀んだ。ここで『君は女の子だよ？』と聞いたなら、色々とまずい気がしてきた。だから、慌てて言い直す。

「君……君の名前は？」

「トゥルートル」

氏族名ノイメンも家族名コグノイメンもない。只のトゥルートルという事らしい。どう考えてもラテン名ではない。金髪白皙の容姿と併せて考えれば、やはりゲルマン系だろう。

ゲルマン人がローマ軍団にいる事は不思議ではない。

この軍団を見渡しただけでも、トゥルートル以外のゲルマン系兵士は数え切れない。ゲルマン人は大柄で屈強、さらに馬術にも優れる傾向にあるので、昔から重宝されているのだ。そも【蛮人バルバロス】や【蛮族バルバロイ】の定義とは、文字通り『言葉が通じない輩』であり、人種や民族ではない。ゲルマン出身であっても、ローマ文明の価値観を受け容れ、法レックスに則したがつる事ができるのであれば、それは決して野蛮人ではない。

……もつとも、トゥルートルは成人男性のようには大柄ではないし、文明の価値観を受け容れているか否かも怪しいところがある。

ユリアヌスは慎重に質問を重ねた。

「じゃあ、出身は？」

その質問にトゥルートルの顔に苛立ちが浮かんだが、一応は答えてくれた。

「コロニア（ケルン）」

「はい？ コ、【植民都市】？」ユリアヌスは首を傾げた。それは普通名詞であって、固有名詞ではない。「ええと、どこの【植民都市】？」

「コロニア・アグリッピナ」

「ああ、コロニア・クラウディア・アラ・アグリッピネンシスね」

ユリアヌスは勝手に捕捉した。

同時に、このトゥルートという少女が男装をし、軍人をやっている理由の一端も察した。文明化や都市化は基本的に女性への『福祉』を強化する。これは世界中で見られる傾向だ。例えば、中央アジアの騎馬民族は『(男女を問わず)馬に乗れない無能は死ね』だった。しかし、後世にイスラム化し、定住化すると『女は馬に乗らなくてもいい、女が馬に乗るなんてはしたくない』になってくる。

逆に言えば、文明や都市——洋の東西を問わず【中原】から離れば、女性への『福祉』は激減する。女性だからと言って、力仕事を免れる事は出来ない。勿論、体格や筋力に差があるので、力仕事に占める男性の割合は大きい。しかし、女性でも頑強そうだったり、人手が足りなかつたりすれば、容赦なく駆り出される。そして、辺境では人口そのものが少ない。必然、女性も力仕事に駆り出される。具体的には【中原】に近いローマのように、男性のみで軍隊を構成する事は不可能だ。

実際、これからユリアヌスが戦う蛮族は、男女の区別なく戦場に立つらしい。一応、女性は兵站等の後方支援が多いものの、前線で切った張ったをする女性戦士も少なくないと聞く。

だから、トゥルートが辺境の植民都市の、しかも、野蛮人が多いゲルマン出身なら、少女の身で、馬に乗り、刃を振るっても違和感はない。

——あの女王ボウディッカもこんな感じだったのかな？ 伝説では赤毛で巨乳だったらしいけれど……いや、今考えるべきはそんな事ではないな。

問題は

——何故そんな『彼女』がローマ軍団にいるのか？

という点である。

ローマは良くも悪くも文明化されている。戦場に女性を連れていく事はない。ありえないと言え、嘘になるが、あくまでも例外だ。軍人の妻帯すら、禁忌とされる。仮にも皇帝であるユリアヌスの衛士に、わざわざ少女を選ぶ必要はない。

——サルステイウス殿はこのトゥルートが少女だと知っているのか？

いや、少女でなくともこのトゥルートが皇帝の衛士に相応しいかは疑問である。別に衛士が一流の教養人である必要はないし、先に述べたようにユリアヌスを促成栽培するつもりなら、強引な性格の方がいいだろう。だが、さすがに『【皇帝】？ 何それ？ おいしいの？』では、皇帝の衛士としてまずいではなからうか？

——この場でトゥルート本人に聞いてみれば話が早くはある……が。

ユリアヌスは自重した。お前は空気が読めないと散々言われてきた。ましてや、この沸点が低そうな少女が相手である。ここは手堅く地元ネタだ。そして、なるべく女性を立てるような話題で行こう。よし。

「いや、コロニア・クラウディア・アラ・アグリッピネンシスが出身かー、これは話が合いそうだなー。僕も、コロニア・クラウディア・アラ・アグリッピネンシスには前から注目してんですよ。だって、その名の如く、あの【女皇】<sup>アウスタ</sup>アグリッピナの出生地でしょう！ 色々言われていますけれど、才女だったと思いますよ。夫の歴史家皇帝クラウディウスが、地味に優秀なせいで、相対的に評判落としてますけど。いやあ、コロニア・クラウディア・アラ・アグリッピネンシス、いいところですねえ」

「……おまえは短くまとめる事が出来んのか？」

余談だが、後世『コロニア』以降は省略された上で、ドイツ語読みされて『ケルン』と呼ばれる事になる。

「コロニア・クラウディア・アラ・アグリッピネンシス——北緯五〇度になりながら、暖流と偏西風のおかげで過ごしやすく、水道橋などの基幹インフラも整備された属州下ゲルマニア（現ドイツ）首都。最盛期には人口四万五千人を超えて、今では……」とユリアヌスは自分で語りながら、重要な事実を思い出した。「今では……あれ？ ……コロニア・アグリッピナは今たしか……」

「とつくに【蛮族】<sup>バルバロイ</sup>に占拠されているよ……！」

トゥルートは吐き捨てた。

\*\*\*

皇帝ユリアヌスの評判は下火だった。

——何といつても、威厳がない！

まず、容姿が小柄で華奢だ。ぱつと見、枯れ木を連想させる。茶色の双眸には明確な意思があるものの、顔立ちが若いというより幼いので、台無し。豊かな茶髪もぼさぼさ。生来の癖毛という以上に、まともに手入れをしていない。まさに貧相な小男と呼ぶに相応しい。

その上、身嗜みも粗末。皇帝の証たる紅の外套を纏っていていながら、足を引っ掛けてすっ転ぶ。また「燃料節約！ それに僕もガリアの寒さに慣れないと！」とか言っつて、暖炉に火を入れないで暮らしている。

当人は『下々の者にも親しみ易い皇帝』を気取っているのかもしれない。しかし、これではなめられる。上に立つ男子は恨まれるのもまずいが、侮られるよりは恐れられた方がいい——そんなトゥルート好みからすれば、最悪と言っつていい。

その癖、やる気だけはあつらしく、散々空回りしていた。



例えば、書類仕事の最中に必要な資料が足りない事に気付くと、ユリアヌスはすぐに自分の足で探しに行ったりする。勿論、サルステイウスはすぐ諫めた。曰く、そんな事は奴隷にやらせればいい。王侯貴族の周りにいつも人が侍っているのは伊達や酔狂ではない。そういう時に職務を分担するためだ。資料探しは奴隷でもできるが、資料を基づき決断するのは皇帝にしかできない。そして、皇帝の決断が遅ければ、負担は現場に押し掛かる。だから、皇帝たるもの雑務はすべて下々に任せ、重要な決断のみに集中する義務がある——と。

サルステイウスは懇切丁寧に説くので、ユリアヌスも一々頷いて反省し、態度を改める事を誓う。

だが、トゥルートに言わせれば、

——そも、その程度の事がわからぬ奴が何故皇帝をやっている？

と苛立たざるを得ない。

勿論、書類仕事はトゥルートの担当外である。しかし、馴染みの会計係が『サルステイウス様が代行されていた時は、十倍仕事が早かった』と愚痴っているのを聞くと、仕事を遅らせるユリアヌスに腹が立ちもする。

どうやら、ユリアヌスには『他人に言う前に、まず自分が動く』という癖が身についているらしい。何度サルステイウスが注意しても、結局ユリアヌスは自ら率先して行動してしまう。

するとトゥルートとしては

——こいつ、どういう人生を歩んできた？

と首を捻る羽目になる。

トゥルートは無学だ。だから、皇帝やら副帝やらが実際のところ、何を意味するのかはよくわかっていない。

だが、それらが【お偉方】だという事はわかり、【お偉方】は『自分が動く前に、まず他人に言う』ものと思っていた。今まで見てきた【お偉方】は皆その類だった。また、それはそれで合理的だったのだのと、他ならぬユリアヌスが逆説で実証してくれた。

結局『他人へ権高に命令を出す』というのも一つの技能であり、その習得には経験が不可欠なのである。実際、トゥルートもいわゆる『叩き上げの兵士』が、士官になった途端に空回りする光景を何度か見てきた。

しかし、逆に言えば、これも経験の問題に過ぎない。出世をした現場上がりも、慣れれば、大概空回りしなくなる。

そして、腹立たしいが、【お偉方】は幼い頃から『他人へ権高に命令を出す』事に慣れていく。だから、ユリアヌスが【お偉方】であるならば、こんな空回りをするのは奇妙なのだが……。

——いずれにせよ、あの時、ちゃんと殺しておくべきだったか？

トゥルートは女だ。そして、その裸をユリアヌスを見た。だから、口封じに殺そうとした。



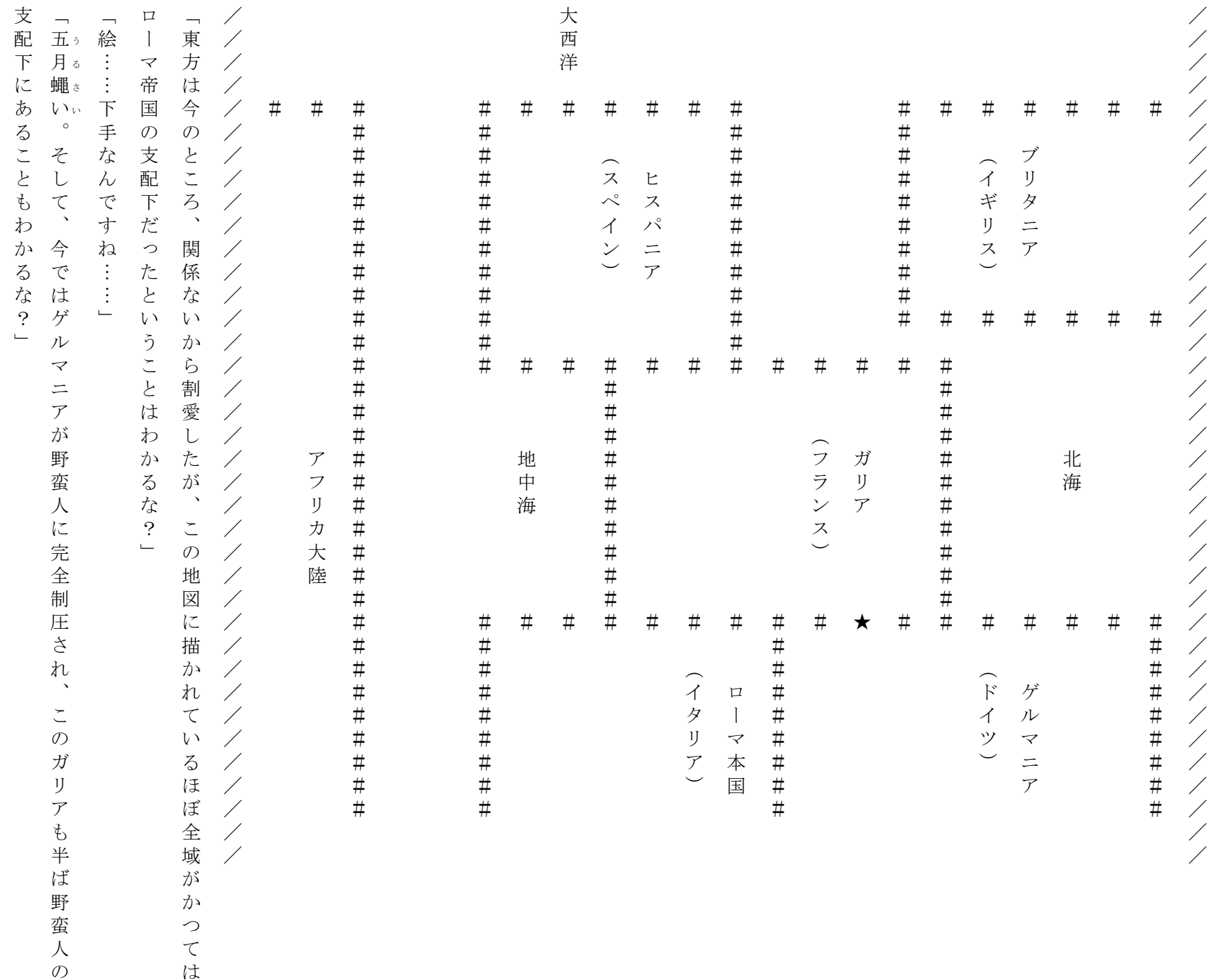


やらなかった作戦に過ぎないのだ。成功の見込みが高いなら、とつくに実行済み。ただ失敗の見込みが高いから、廃案になつていたという事だ。しかし、

「それに……そうだな。お前も世界情勢を少しは知っていた方がいいか……」

とサルステイウスは地面に絵を描いた。そして、指で示す。

「これがローマ世界の西半分の概略図だ」



「アフリカ諸国は勿論、ポルトガルとかオランダとかスイスとかその他諸々も怒りそうな地図ですね……」

「訳のわからん事を言うな！ 重要なのは、ここでガリアまで失ったらどうなるかという事だ！」

「ローマ本国が包囲される？」

「戦士の発想だな」

「すみませんね。突撃馬鹿なもんで」

「いや、それも正しい。しかしな、この規模で重要なのは経済だ。ガリアを中継点としているブリタニアやヒスパニアとの輸送が途絶するという事だ。これはローマ帝国の西半分を失うに等しい」

「言われている事の意義がトゥールトには今一つピンとこない。だが、補給がなくなると言われれば、前線の兵士である以上、その意味は分かる。」

「しかし、サルステイウスが恐れているのはそれだけではないという。」

「軍事物資以外の流通も途絶える？」

「民間でも死人が増えるだろうな」

「????」

トゥールトは疑問符を浮かべた。対するサルステイウスは大人である。すぐ説明を補足する。例えば、塩も薪まきも人間の生存に不可欠なものだ。が、塩は海で採り易く、薪は山で採り易い。仮に、海では百の薪まきを採っているが、これに使う人手で千の塩を作れ、山では百の塩を採っているが、これに使う人手で千の塩を作れるとする。ここで海と山での流通が確保され、海では薪を採るのを止め、すべて輸入に頼るようになり、山では塩を採るのを止め、すべて輸入に頼るようになったとする。

そうすると、同じ人手でも単純計算では、薪も塩も九百採れる量が増える。山で使える塩は九倍になり、海で使える薪も九倍になる。勿論、塩や薪を運び、売り買いする商人がピンハネをするものの、一割程度中抜きされたところで、総量が九倍になるなら、お釣りがくる。

これらを理想論と一笑するのは容易い。たしかに現実の商品経済は一枚岩では行かない。だが、先の述べた比較優位性やその他多くの相乗効果によって、安定した流通を保証されれば、世界全体の富——そして、その富によって救われる人命が増えるのもまた現実なのだ。

それらをローマはガリアやヒスパニアやブリタニアでやっている。

これが世界帝国の力の源である。

では、その前提が崩れば？

前述の原理で、倍増している生産力が激減したら？

「我々が日頃使っている金属の補充すらままならなくなるだろう」

「……はあ、さすがに元財務官僚様は難しい事を考えていらっしやる」

「いや、半分はユリアヌス様の受け売りだよ。私も観念的に把握してただけで、このように論理的な思索はしていなかった」

サルステイウスは本気で感心しているようで、ユリアヌス曰くの話が続ける。

「『ローマは土木国家だから、高速道路や上下水道の優秀さが目立つ。勿論、それらインフラの重要性は言うまでもない。が、それは一定自己完結しており、個々の小規模国家でも一定維持できる。しかし、ネットワークは帝国でなければ、維持できない。ローマ帝国の価値はネットワークにあるともいえる。逆に言うなら、そのネットワークが維持できなくなれば、諸国民もローマに帰属する価値を見失う。そうなれば、ローマからの離反者が連鎖的に相次ぎ、帝国はバラバラになり、物流も滞る。生活水準の低下、人口の激減が待っているだろう。それこそ、インフラ整備すらままならなくなる程に。高度技術集積体たる水道橋などは悪魔の仕業として、忌み嫌われるかもしれない』」

「……………」

「『そう、さしずめ——【暗黒時代】……………!』」

「……………あいつのそういう言い回し……………何とかありません？ 背中痒くなってくる」

「そうか？ 若者らしくていいと思うのだがなあ……………」

——駄目だ。この人は……………」

トゥルートは呆れた。サルステイウスは経験と知性を兼ね備えた頼れる上司である。なのに、ユリアヌスに対しては我が子を神童扱いする親馬鹿になってしまうらしい。

「いずれにせよ、この地図のうち、ブリタニアとヒスパニア、そして、今我々がいるガリアがユリアヌス様の権能領域、逆に言えば責任範囲だ。……………そして、この★がお前の故郷でもあるコロニア・アグリッピナ」

ここを奪還できれば、とりあえずガリアは野蛮人による半占領状態から脱出できる。少なくとも、この★のところを栓ができれば、ゲルマニアから延々と野蛮人が流れ込んでくる事もなくなる。そうすれば、『内政』の問題に移れる。ガリア内に野蛮人が残留しようと、各個撃破も容易い。

また、既に半ば途絶しているガリアを中継点としたブリタニアとヒスパニア、さらにローマ本国との物流も回復する。そうなれば、先に述べた原理で国力も取り戻せるというわけだ。

「了解。コロニア・アグリッピナ奪還の経済的な意義とやらは解り……………解ったつもりですが、しかし、先程もお尋ねしたように、問題はそれが軍事的に可能か否かでしょう？」

「……………」

途端にサルステイウスは黙り込んだ。

思わず、トゥルートの声が荒くなる。

「あいつ……………いえ、ユリアヌス様はわかっていらつしやるんですか？ 今のガリアの状況を！ 昔話は随分知っているみたいですけど、……………もしかして、今のローマに昔と同じ力があると

思っているんじゃないでしょうね？」

「知らずとも、肌でわかるだろう。いや、わざわざ冬のアルプスを越えてきたのは、そのためかもしれない」

トゥルートにはユリアヌスがそこまで賢明に思えなかった。

だが、サルステイウスは言葉を重ねる。

「……そう言えば、お前は平和を知らない世代か……。いや、私も同じだ。【ローマの平和】が機能していた時代など書物で読んだことしかない」

その頃にはアルプス越えなど、さしたる苦勞ではなかったという。

整備された街道沿いに歩いて行けば、一市民でもエジプトからガリアまで辿りつけた時代があった。蛮族は遙か北方の防衛線で喰い止められ、その内側の治安は保たれていた頃があった。

——ましてや、皇帝の称号を持つならば尚の事、幹線道路に一定間隔で配置されている

【公営宿泊所】で、十二分な補給と休息が約束されていた時代もたしかにあったのだ。

しかし、それも全て過去の話だ。

今のガリアなどでは、武装したローマ軍団ですらも、道を歩く時にビクビクしている。自国領土でありながら、いつ蛮族が襲撃してくるかわからない危険地帯になってしまったからだ。

既に【ローマの平和】は過去の話なのだ。

「だからこそ、ユリアヌス様は冬のアルプス越えを決意なされたのだろう。昔のローマの強さではなく、今のローマの弱さを知る為……。頭でっかちという自覚があるからこそ、現実の厳しさを頭ではなく、身体に叩き込むために……」

「それは……！」

——あのへなちよこ野郎を過大評価し過ぎだ！

とトゥルートは苛立った。所詮はこのサルステイウスも元官僚だ。文人肌のユリアヌスとはさぞ話も合うだろう。だから、見る目も甘くなるに違いない。

しかし、トゥルートにも理性はある。さすがに言葉を控えた。

「なら、二個軍団でも連れてくりやいいのに……」

「だから、今のローマにその力がないのだ」

もつとも力があれば、二個軍団を下素人のユリアヌスに指揮させる事もなければ、そもそもユリアヌスが皇帝になる事もないだろうが——とサルステイウスは苦笑した。

「じゃあ、せめて……もつと皇帝らしいお膳立てをするべきでは！？」

豪華な服、豪華な冠、派手な取り巻き——そういったものがあるだけで、皇帝の権威は違いうだろう。権威が軍団の士気向上に繋がるのなら、トゥルートも応援する。だというのに、あのユリアヌスときたら、まるで貧乏学生ではないか。

「挙句、アルプスで迷子になったりして……。曲がりなりにも皇帝でしょう。お忍びでも伴の一人や二人は侍らせるべきでは？」

「その理由はいずれお前にもわかるだろうが……」そこでサルステイウスは苦笑の中の皮肉を強める。「今は知らないまままでいてくれ。……頼む」

「……」

……何だかんだと言って、あたしはあんたを信頼している。だから文句は言わない。だが、知識人というのは本当に訳がわからない。無学なトゥルートは心の底から思った。

\*\*\*

意外とユリアヌスには体力があった。

どうしようもなく、ヘタレだが、忍耐もあった。

実際、過酷な行軍でも泣き言一つ洩らさない。内心、音を上上げる事を期待していたのに。

——一介の新兵とすれば、そこそこまともか……。

トゥルートは少し見方を変えてみる。皇帝と言えば、御輿みこしに乗って、宮殿を渡り歩く印象があった（そして、それは一般論として正しい）。が、ユリアヌスは自ら馬みまに跨り、冬またがのガリアを進んでいる。ぶっちゃけ、馬術も下手糞で、おっかなびっくりという有り様だが、その分、兵士と辛苦を共にしていると見えなくもない。

——夜は慣れないなりに政務に励んでいるらしいな……。

文旨に近いトゥルートにはできない事だ。その点ではユリアヌスも立派に見えた。

……勿論、それは只の勘違いだったのだが……。

ユリアヌス率いるローマ軍は、兵力を集めつつ北に向かっていった。

ガリアは野蛮人にズタズタにされているが、逆に言えば、その切れ端は各地に残っている。散り散りになってしまっているが、ローマ軍の戦力はあちらこちらに残っている。それを

【皇帝カエサル】ユリアヌスの名のもとに合流させていた。

——ユリアヌスを『皇帝陛下』『皇帝陛下』と持ち上げていたのはこのためか……。

トゥルートにもサルステイウスの考えがわかってきた。ユリアヌスがド素人でも構わない。重要なのは皇帝の権限と権威で戦力を集める事なのだ。

野蛮人は勇敢だが、統率に欠ける。ガリアに侵入してきているのも、水が高いところから、低いところに流れる様なものだ。確固たる目標や計画があるわけでもない。

こちらがシステマティックに戦力集中の原則を実行しても、それを妨害される危険は低い。また各地の防衛も都市の城壁で何とかしのげる。繰り返し返すが、野蛮人には統率に欠けるので、動きがバラバラなのだ。戦力を集中して、困難な城壁攻略に挑む事が出来ない。

結果、中継点のドウロコルトム（現ランス）に集まった兵士は二万にもなった。

これだけの戦力なら、ユリアヌスが多少の下手を打っても、最後は数で押し切れるだろう。それに実際の指揮はサルステイウスが執り、実際の戦闘はトゥルート達が行えばよい。

——なるほど、お飾りの皇帝にも価値がある……。

季節は春。トゥルートの気分も高揚していた。

既に大軍となったユリアヌス一行はコロニア・アグリツピナに向けてさらに前進する。

しかし、戦力が集まれば、それ故の問題が起きるのだった。

「揉め事だつて？」

行軍中、報告を受けたユリアヌスの声は怯えていた。何でも、最近合流した部隊の一つが、他の部隊と喧嘩になったという。今のところ、死者は出ていないようだが、このままでは敵と戦う前に味方同士で殺し合う羽目になる。

ユリアヌスは思わず飛び出し、その場に向かおうとする。だが、

「皇帝陛下っ！」

とサルステイウスが大声を出した。そして、

——その程度の事は自分がやる。あなたはそろそろ自ら率先して動く悪癖を改めなさい。

無言の視線で実質的な指揮官は名目上の指揮官を諫める。

その上でサルステイウスが皇帝ユリアヌスを持ち上げた。

「あの部隊はかなり強いガリア訛りで話します。揉め事の原因もそこにあるかと——ですが、私なら各種方言も理解できます。ここは是非とも……」

「う、うん。そうだね。サルステイウス、君に任せる」

「御意！」

そして、サルステイウスはユリアヌスの下を離れた。

しかし、この判断をサルステイウスは生涯後悔する事になる。

\*\*\*

いきなり、野蛮人が背後から襲撃していた。

——だが、数で押し返せる……！

そう考え、トゥルートは周りを見渡す。

二万の味方が……そこにはいなかった。

「え……？」

俯瞰すれば、そこは丘陵地帯だったのだろう。

大軍が歩ける場所ではなく、細く長い隊列になりがちだ。全体としては、二万の兵士がいたはずだが、それらが分散してしまっていたのだ。

文官とはいえガリア出身で、地理に精通しているサルステイウスがいれば、避けられた失敗だろう。しかし、トゥルートのガリアというよりも、ゲルマニア出身なので、この辺りの地理には詳しくない。第一、トゥルートの任務は護衛であって指揮ではない。

逆に野蛮人は何年もこの辺りで略奪を続けており、既に地理を熟知している。さらに勇敢で実戦経験も豊富。統率に欠ける短所も、この場合は臨機応変に動ける長所である。

勝てるはずがなかった。

それでもトゥルートの達は必死に応戦する。

野蛮人はアラマンニ族らしい。槍で攻めてきた。だが、トゥルートの槍を最も得意とする。

乱戦になったが、それ故に個人の武勇がものをいう。そして、アラマンニ族達も己の槍働きの誇りを持っていたので、必然、槍と槍の争いになる。ならば、

【ゲイルスケグル槍戦】であたしに勝てる奴はいない！」

トゥルートの腰の入った薙ぎ払いで、敵兵の首級を跳ね飛ばす。

我ながら、会心の一撃だった。だが、その右隣では戦友が突き殺され、前方では新兵が射殺された。

「くそっ……！」

トゥルートの獅子奮迅の働きで三人殺しても、敵兵はその間に十人を殺す。

当然だ。一人の武勇で戦局が覆るはずもない。

結局は戦術戦略がものを言う。指揮官こそ戦局を動かす鍵……と、トゥルートの衛士本来の役割を思い出し、背後を振り返る。しかし……、

**ユリアヌスは初めての実戦の恐怖で泣き喚いていた。**

「プラトン、助けてよ！ アリストテレス、僕を助けてよ！」

ユリアヌスは一人裏返った声を上げていた。

皇帝の衣装をまとったクソガキが泣き喚いていた。

ローマ軍団は敗勢においても、皆が命がけで戦っていた。だが、ユリアヌスは一人、自分に心地の良い幻想に逃げ込んでいた。

「ぼ、ぼ、僕は学者になりたいんだ。元々軍人やら皇帝やらになんか、なりたくは……！」

「………っ！！」

混乱の中、衛士トゥルートの皇帝ユリアヌスをぶん殴った。

さらに皇帝の首根っこを馬から引き下ろす。「兄さん……兄さん……」と意味不明のたわ言を繰り返しているが、知った事ではない。





かつ開いてしまえよ、ゲルトルト！

しかし、黙々と縫合準備に取り掛かると頭も冷える。

あの奇襲——サルステイウスなら防げた。だが、他の指揮官ならどうだった？ ユリアヌス以上の采配がとれたか？ 第一気付かなかったのはトゥルートも同じではないのか？ 地元でないにせよ近場だったろ？ しかも自分は意見具申を許される立場でなかったのか？ なら、あたしの怒りは八つ当たり……。

しかし、次のユリアヌスの一言で再び頭に血が上る。

「ああ、この傷は内臓に達していない。だから、僕は大丈夫……」

トゥルートは頭突きでその口を黙らせた。

「阿呆！ 素人が勝手に判断するな！ 戦闘中は興奮で痛み鈍くなるんだ！」

銅針も麻糸もろくに消毒していない。しかし、火を熾す暇もない。とりあえず、出血だけは抑えねばならない。薬草をたっぷり塗って、傷口を縫い合わせる。後で化膿したら、専門家に再手術してもらうしか……

しかし、次のユリアヌスの一言でまたまた頭に血が上る。

「いや、本当に大した事ないよ。それより他に負傷している兵士はいるだろうから……」

トゥルートは再び頭突きでその口を黙らせることになった。

「どこまでボンボンなんだよ！ こういう時は味方を押しつけても自分の命を惜しめよ！」  
これではつきりした。この馬鹿は自分が生きているのが当たり前だと思っっている。だから、血を流しながらも『僕は大丈夫』などと言えるんだ。暖衣飽食に囲まれて、何の不自由もなく歳を重ねてきたに違いない。だから、生きる事への執着がない。それでも、生きてこられた。要するに【貴族】の甘ちゃんなんだ。けれど、お前の住んでいた生暖かい世界は、この宇宙のほんの一握りなんだ。死ぬ時は死ぬ。絶望を知る前に人間は死ぬ。むしろ、それがこの世界の普通なんだ……！

そんな怒りは黙って糸と針を動かしていても顔に出たらしい。

ユリアヌスは鼻頭を抑えながら、神妙に尋ねてきた。

「……僕は傲慢かな？」

「ただの間抜けだ。危機感が欠如しているだけだからな」

トゥルートは苛立ちつつ、胸元から布切れを取り出し、傷口を縛り付けた。するとユリアヌスは何やら感心したらしい。

「ところでこの布は何？ 珍しい形だし、技術的にも見るべきものが……」

「……ストロピウムだよ」

「はい？」

「乳当て紐だよ！ 悪いかよ！」

縫合完了。両手が空いたトゥルートは大きく振りかぶって、ユリアヌスの顔に拳を叩き込む。

ちなみにストロピウムとは後の世でいうブラジャーであった。

「とにかく、これに懲りたら、二度と自分で前線に出るなんて言うなよ」  
トゥルートは照れ隠しもあり、言葉を重ねる。

「……だから、殴られたユリアヌスの目の色が変わった事に気付かなかった。

「サルステイウスのオヤジに丸投げして、お前は宮殿にでも引っ込んでいろ。そうすりゃあ、こんな目に会わずに済む。ヴィエンナはまだ平和だし、酒も女もある。なっ、そこに行つて、面白おかしく過ごせ。戦乱なんて忘れちまえ」

「それはできない。僕は皇帝だ。ガリア全土に平安を取り戻す義務がある」

「現実を見るよ！」

「そうやって、現実ばかり見ていたから、兄・さん・は死んだんだ！」

ユリアヌスは初めて声を荒げ、トゥルートに『兄さん』と呼んだ。

「ああ、そうさ！ 兄・さん・は凄いきさ。強くて、勇ましくて、僕にないモノを全部持つてつて。

カッコよくつて、女の子にもモテモテで、そりゃ正帝陛下だって、兄さんを副帝にするさ……

……でも……でも……、死んじゃったなら、何にもならないじゃないか！」

トゥルートもようやく気付いた。……やはりユリアヌスは現実が見えていない。

——こいつには……あたしが死んだ『ガルス兄さん』とやらに見えているんだ。

\*\*\*

ユリアヌスは六歳の時に父を殺された。

殺したのは実の従兄弟だったと言われる。とどのつまりは権力争いのとぼちりだ。

当時、ローマ帝国は複数の皇帝で分割統治する事になっていた。既に疲弊していたインフラでは単独統治を行おうにも無理があるという判断だ。

だが、その従兄弟コンスタンティウス二世は違った。コンスタンティウスはユリアヌスから見ても臆病な人間だった。だから、分割統治に不安を抱いたらしい。つまり、

——殺らなければ、殺られる！

と疑心暗鬼に陥ったのだ。

そして、先手必勝とばかりに自分以外の皇族を皆殺しにした。親類縁者大虐殺である。

……つくづく、とぼちりだ。ユリアヌスの家系は皇族といっても傍系なのだ。おぼろげに覚えているだけの父だが、野心のなかった事は確信できる。

いずれにせよ、ユリアヌスは実兄ガルスと二人身を寄せ合つてビテュニアの祖母のもとへと

赴く事になる。

しかし、兄ガルスは頼もしかった。

元々、ユリアヌスは内気な少年である。当然、家族を失ってからはずます塞ぎ込む。だが、そうやって引きこもっていると、必ず兄ガルスは「お前もたまには外で遊べ！」と引っ張って行ってくれた。

豪放磊落で、狩猟を好み、現実世界を駆け巡る事を趣味にする兄ガルス。

繊細可憐で、読書を好み、妄想世界に没入する事を趣味にする弟ユリアヌス。

どこまでも対称的な兄弟だった。話が合うはずもない。共にいて愉しいはずもない。だが、それでも兄ガルスは弟ユリアヌスを見放さなかった。

ユリアヌスは不安で眠れなくなった夜、兄の寝室へ赴いた事がある。すると、ガルスは苦笑しながら、布団に招き入れてくれた。そして言ってくれた。

——「おまえは本当に気が弱いなあ。だが、いじけるんじゃないぞ。それはお前の個性だ。

俺も武勇には自信もあるが、哲学はからつきしだ。逆にお前も武勇は駄目だが、哲学は凄いいうじゃねえか。……まあ、どう凄いのか、馬鹿な俺にはさっぱりだがな」

兄ガルスはケラケラ笑いながら、弟ユリアヌスをギュッと抱きしめた。

——「よし、お前は頭がいいんだ。偉い將軍になれ。で、俺は前線で暴れまわる勇者になる。頭のいいお前が作戦を立てて、勇ましい俺が実行に移す。どうだ？ いい話だろう。いいな、お前は俺をも使いこなす将になるんだ。だから、いじけるんじゃない。弱気になるんじゃない。負けるんじゃない……！」

今思えば、あの時、兄ガルスは震えていた。当然だ。兄にしても十二で父親を失ったのだ。辛くなかったはずがない。それでも、弟の前では兄として気丈に振る舞っていたのだ。

しかし、兄ガルスが十八、弟ユリアヌスが十二の時、再び運命は変転する。

その頃、例のコンスタンティウス二世は既にローマの唯一皇帝となり、権力を握っていた。なのに、何故か、まだ少年の従兄弟達いとこたちが気がかりになったらしい。それも悪い意味で。

ガルス・ユリアヌス兄弟は幽閉される事になった。

理由は今でもよくわからない。いずれにせよ、ガルス・ユリアヌス兄弟は青春の六年をそれぞれの牢獄で過ごす羽目になる。一応名目はキリスト教会による『保護』だったが……。

そして、兄ガルスが二十四、弟ユリアヌスが十八の時、さらに運命は変転する。

ローマ帝国の西方で反乱が起きたのだ。コンスタンティウスは自ら鎮圧に向かおうとする。しかし、そうすると東方が留守になる。誰か信頼できる者に東方を任せねば——と考えて戦慄したのでろう。

コンスタンティウス二世に『信頼できる者』が一人もいなかった。

当り前だ。『信頼できる者』がいれば、親類縁者大虐殺などやらかす必要もない。

考え抜いた末、一応は血が繋がっているガルス・ユリアヌス兄弟を思い出したらしい。そも

兄弟の父を殺したのはコンスタンティウスである。しかしそれでも、他に人がいなかったのだ。余程、信頼とは無縁の人生だったらしい。

おかげでガルス・ユリアヌス兄弟の幽閉は解かれた。さらに兄ガルスには【副帝】カエサルの地位が与えられた。これは【正帝】アウグストゥスコンスタンティウスに次ぐものだ。弟のユリアヌスについては『あれ、そんな奴いたっけ？』という扱いだったが、それは正当なものだろう。哲学オタクの引きこもりに、現実の権力を与えようとする方がおかしい。

実際、寛容というよりも無関心故にユリアヌスのギリシャ留学も認められた。

ユリアヌスは大喜びだった。幽閉から解放された事も、哲学オタク垂涎のギリシャ留学も、最愛の兄が【副帝】カエサルとはいえ【皇帝】インペラートルの地位に就いた事も、すべて上手くいっているように思えた。

兄弟の再開を果たすまでは……。

六年ぶりの兄ガルスは端的に言って、壊れていた。

鷹揚さは思慮浅さに、勇敢さは凶暴さに変わっていた。

兄ガルスは誰にとっても有害無益な暴君となり果てていたので。

ユリアヌスの予想通りに、ガルスは任地で暴政を始めた。ガルスを将棋で負かした高官を「副帝の権威を侮っている！」と処刑したり、ユダヤ教徒を「キリストを迫害した連中だ！」と虐殺したりした。

これにはコンスタンティウスも眉を顰めた。幸い西方の反乱も治まった。こんな奴に国土を任せておけるはずがない。

事後承諾でだが、ユリアヌスにも意見を求められた。が、コンスタンティウス二世の判断に賛同せざるをえなかった。保身や追従ではなかった。本心からの賛同だった。

コンスタンティウスは憎むべき仇である。ガルスは最愛唯一の兄である。しかし、それでもなおガルスを排除するコンスタンティウスを支持した。それ程まで兄は壊れていた。

だから、兄ガルスはあっさりと処刑された。

……考えてみれば、幽閉された時点でこの結末は半ば決まっていたのだ。

兄ガルスは外向的で、弟ユリアヌスは内向的な性格だった。ガルスは現実世界を駆ける事に趣味にし、ユリアヌスは妄想世界に浸る事を趣味にしていた。

極端な話、狩猟は牢屋では出来ないが、読書は牢屋でもできる。

弟ユリアヌスは現実が辛ければ、すぐに妄想に逃避できた。読み飽きた聖書でもその程度の役には立つ。しかし、兄ガルスは現実が辛くとも、それを直視する事しかできなかったのだ。どちらにとって負担が大きかったのか？

弟ユリアヌスにとって幽閉生活も大した苦にならなかった。だが、兄ガルスの心がどれだけ抉り取られたのは想像に難くない。

「何が現実だよ。そんなの大嫌いだ。そんな下らないものに付き合っていたから、兄さんは……

「…兄さんは…」

現実という言葉が嫌いなのは、この概念が兄の仇だからだ。

「ガルス兄さん…：どうして…：どうして…：僕を置いて死んじゃったんだよ…：」

ユリアヌスは眼前の人影に倒れ込む。すると柔らかな二つの丘があった。

「あれ…：…？」

弾力溢れ、絶妙の触り心地をぶにぶに調べていると…：…。

「…：あたしはお前の兄貴じゃねええー！」

絶叫と共にユリアヌスの顔面に前蹴りが炸裂した。

「前に見たろ！ あたしは女だよ！」

眼前の人影——トゥルートの高らかに宣言する。

「へ？」

ユリアヌスは左右を見渡す。例の洞窟の中だ。意識が明らかになるに従い、自分が何をやらかしたのが…：…。

「も、もしかして、僕は妙な事を口走っていないかった…：…？」

「聞いていない！」 トゥルートの何故か頬を染めていた。「ギリシャ語交じりだったし、お前に少し熱があったし、気付けに酒も使ったから、意味不明だった！」

「そ、そう…：…？」

「だ、だから、お前も忘れろ…：…」

「え、何を？」

「あ、あたしが…：…その…：…察しろ！」

そう言われて、ユリアヌスは考え込む。すると、脳裏に全裸の少女が思い浮かんだ。さらに先程の双丘の感触が結びつく。何だか心臓が高鳴っていると…：…。

「顔を赤らめているんじゃないわー！」

トゥルートの前蹴りが再びユリアヌスの顔面に炸裂した。

「わ、わかった。君が女だという事は公言しない。秘密にしておく」

「ならばよし！」

と、トゥルートの放言して、己の背をユリアヌスの背に預けてきた。その柔らかな重みが、やはり少女なのだと思えてくる。

そして、二人の間に沈黙が続く。

先に口を開いたのは『彼女』の方だった。

「お前、兄貴がいたんだな…：…」

「…：うん。死んじゃったけどね」

「…：…」

「…：…」



「お前さ……あたしの弟に似ているんだ。頭でっかちで理屈ばかりで……でも、最後は妹のために戦って、勇敢に死んでいった」

「……君はやっぱり兄さんに似ている。豪快で乱暴で……でも、僕には優しい」

ユリアヌスの気持ちが和らいだ。しかし、トゥルートは声音を変える。

「……ん。ちよっと待て。お前、あたしより年上だろ」

「え、そうなの？ 僕はもうすぐ二十五だけど？」

「あたしはまだ十六だよ！ というか、おまえは今二十四ってマジなの？ 十四歳ぐらいじゃねーの？」

「ふっ。つまり、僕の魂が若々しいという事だね。実際の人生経験が乏しく、精神的に未成熟なんだよ。だから、見た目も若いんだ」

「お前の場合、若いというよりも幼いだろう！」

その時「皇帝陛下！」という声が外から届いた。

ユリアヌスが振り返るとトゥルートは頷く。

畏の可能性は低い。そう考え、二人で洞窟を出る。

すると、一人のローマ将校が駆け寄ってきた。

「ご無事ですか、皇帝陛下！」

「……アンミアヌスか？」ユリアヌスは一瞬迷ったものの、すぐにその名を思い出した。「僕は軽傷だ。すぐ動ける」

「おお、皇帝陛下……！」

そう言ってアンミアヌスは膝をつき感涙していた。

——この期に及んで、まだ僕を皇帝カエサルと崇めるか……。

このアンミアヌスは同じ東方出身で、自然と記憶に残っていた。たしか対ペルシャ戦争では決死の脱出劇も経験している。……それ程の男が泣いている。

——人は弱い。

ユリアヌスは思った。だから、こんな名ばかりの皇帝にでも縋り付きたくなる。

だが、これが普通なのだ。決然と糾弾する勇氣を持ったトゥルートの方がおかしい。

そう思って、彼女を見ると最早仮初の敬意ですら失っているらしい。

「何だよ？」

「いや【女神】パーケスみたいだなと思って」

トゥルートは見えない角度から、蹴りを入れてきた。

ユリアヌスは痛みを顔に出さないようにし、将校に向かう。

「アンミアヌス、状況説明を」

「はい。敵兵が……もうすぐそこまで迫っております」



「一万」

「…一万二千です」

「……………八千？」

最初にユリアヌスが、次にアンミアヌスが、最後にトゥルートが大幅に遅れて、敵兵概数を弾き出す。一度に目視可能な敵数から、その総数を推定するには、簡単な算数が必要になる。だから、トゥルートが一番遅かったのは不思議ではない。しかし、アンミアヌスがユリアヌスよりも遅かったのは、皇帝であるユリアヌスを立てたのか……。

「いずれにせよ、敵兵総数は約一万という事だね」

「はっ」

「こちらの手元にあるのは？」

「……………約五百。騎兵が百に、歩兵が四百という内訳です。正確な数は調査中ですし、今後合流する友軍兵士は多いでしょうが……………」

「なるほど、僕は一敗して、二万を五百まで減らしたか……………」

「……………」

アンミアヌスは押し黙った。

勿論、万単位の兵士がそんな簡単に消えるわけもない。まして、先の敗北はあくまで奇襲によるものだ。敵も殲滅を狙っていたわけではない。ローマの兵士はほとんどが生き残っているはずだ。ただ散り散りになっている。ユリアヌス達五百人がその欠片の一つであるように。

——とはいえ、兵士が僕に愛想を尽かした可能性は高い。僕がもう一度戦おうと呼びかけても……………。

そして、さらなる問題がこの敵兵だ。

幸いこの一万はユリアヌス達に気が付いていないようだが……………。

「あの敵兵の目的地は？」

「……………おそらく」アンミアヌスは苦い声を出す。「ドウロコルトム（現ランス）かと……………」

「ああ、やっぱり……………」

方角からして、そんな予感はしていた。このアンミアヌスは『ガリア歴』が浅い。だから、サルステイウス程重用していない。しかし、軍歴自体は中々のものだ。彼の判断なら、間違いない。あるまい。

やはり、彼らはユリアヌス達が中継点にしたドウロコルトムを狙っているのだ。

二万もの兵士を送り出せば、どんな都市でも疲弊する。さらに現地徴兵も行った。今、ドウロコルトムの防衛力はあらゆる意味で低下している。あの蛮族軍はそこを衝く算段なのだ。

「——ドウロコルトムには非戦闘員の市民も大勢いたよねえ」

「おい……何を考えている？」

そこでトゥルートの口を挟んできた。さすがの彼女も将校同士の会話では黙っていた。が、今度ばかりは違うらしい。

しかし、ユリアヌスはただ皇帝<sup>インペラトル</sup>として告げる。

「トゥルト、君を【筆頭衛士<sup>プリムス・リクトル</sup>】に任命します。決して僕の傍を離れぬよう」

「！？ 落ち着け！ こっちは五百、あっちは一万だぞ！ 勝てるわけきゃねーだろ！」

「ガウガメラの戦いを思い出して下さい。あの戦いでは五万で百万を打ち破っています。彼我戦力比としては妥当なところですよ」

ユリアヌスは信じてもないことを言った。いくら当時のペルシャが豊かだったとしても、現実に百万の軍隊を運用できるはずがない。せいぜい十万を超える程度だろうと考えている。

が、トゥルトは押し黙った。その顔に教養のなさが滲み出ている。おそらくガウガメラの戦い自体を知らないのだろう。当然だ。ガリアやゲルマンはおろか、ローマとも無関係な千年前の伝説など、知っているユリアヌスの方が珍しい。

「状況も似ています。敵は一言にゲルマンと言っても、内実は多民族の混成です。言語ですら、統一されているとは言いがたい。連携は不十分なはず。その間隙を突きます」

ちなみに連携が不十分なのは、友軍も同じである。我らがローマ帝国ガリア方面軍も訓練は行き届いていないからだ。しかし、その事は口にしなかった。

だが、アンミアヌスの顔面は蒼白になった。こちらはトゥルトと違い、ユリアヌスが口にしない事も熟知している。ただ、皇帝に正面から反論する気概を持ち合わせていないのだ。しかし、結論は変わらない。

「アンミアヌス、歩兵四百を任せます。左翼を衝きなさい。勝てとは言いません。ただし、敵軍を引きつけなさい。死んでも引きつけなさい。騎兵百は僕が自ら率います。アンミアヌス達歩兵四百が広げた間隙を縫い、敵指揮官を打ち取り、この戦いを終わらせます」

そして、自ら駆け出した後の事はよく覚えていない。

ただ、あの時のユリアヌスはユリアヌスでなかった。己の死をも恐れなかった哲人の後継者であり、どこまでも猛々しかった兄の模倣者であった。

——プラトン！ アリストテレス！ 古<sup>いにしえ</sup>の探究者達よ！ 愚かなる我に導きを！

「雑兵に構うな。雑音を立てるな」

——……ガルス兄さん、僕に勇気を……！！

「とどのつまりは暗殺だ。五百で一万を退けるにはそれしかない」

——女神よ！ 汝<sup>スィー・ウィース・バークム</sup>、平和を望むなら、戦争<sup>バライ・ベツルム</sup>に備えよ！

「私は市民を守る……ローマの皇帝だッ！」

\*\*\*

共に駆けながらトゥルートは思った。

——こんなに安っぽい台詞はない！

国王だの皇帝だのは、所詮は盗賊の親玉と大差がない。違うのは、盗賊は潔くも問答無用で奪うのに対し、為政者は奪う時に屁理屈をこねるところぐらいだ。

そう思っていた。

別働隊のアンミアヌスは泣いていた。

いや、アンミアヌスだけではない。ユリアヌスに従っている兵士こいつ悉くが涙を流していた。

血臭漂う戦場で、只人の群れは苦痛や恐怖ではなく、感動で泣いていたのだ。……トゥルート自身を含めて。

無駄無駄。何をやってももう終わり——口先ではそう言いながら、心では誰もが望んでいたのだ。

至弱いじき我らを救いたもう存在を——。

\*\*\*

トゥルートが軍人になったのは仇打ちのためだった。

六年前、ローマはコロニア・アグリッピナを失った。

当時十歳だったトゥルートにとっては故郷を焼かれた日でもある。

それまでトゥルートは自分を『文明人』とは思っていなかった。馬に乗り、野を駆け、獣を狩る事を至上の喜びとしていたからだ。それを「女の子がはしたくない！！」と罵るローマ人はむしろ嫌いだった。ゲルマン出身の金髪に誇りを持っていたぐらいだ。

……本当の『野蛮人』がやってくるまでは。

彼らはすべてを奪っていった。麦も、金も、父も、母も、すべて奪われ……殺された。

弟は妹のため、勇気を振り絞って、立ち向かった。が、よってたかって逆に組み伏せられた。さらに野蛮人は弟を剣撃の練習材料にした。

生きながら、細切れにされていく弟を見て、ゲルマン人はケラケラと笑っていた。

そして、初潮もきていない妹が輪姦された。

だから、トゥルートはローマ帝国ガリア方面軍に参加した（戦乱ゆえに入隊試験は実に杜撰だった）。勿論、食料も目当てだった。しかし、本質は復讐だった。

——男装する自分をあのローマ人は「女の子なのにはしたくない！」と罵るだろうか？

一度だけそんな事を考えた。が、すぐに忘れた。どの道、あのローマ人も死んでいる。トゥルート達『女子供』が脱出する時間を稼ぐため、彼は野蛮人に決死の突撃を行ったのだから。

——あの尊敬すべき男の仇も取らねばならない！

——そのためには罵られようと構わない！

そう考え、槍を握り、戦場に出た。ローマ軍団の一員として、逆境の中を這い蹲って、生き抜いた。その結果、まだ十六でありながら、経験と実力を認められた。サルステイウスからの信頼も厚い。

と、同時に自分の限界も悟っていた。

今思えば、トゥルートがユリアヌスを毛嫌いしていたのは、彼の中に弟の影を見たからだ。彼を見る度に、弟を守れなかった情けなさに苛立っていたのだ。

そして、ユリアヌスが理想を口にする度に……、

既に復讐を諦めていた自分が後ろめたかったのだ。

\*\*\*

この戦いは後世で言う桶狭間のようなものだったのだろう。

——何故、ユリアヌスはガリアで成功したのか？

実に不可思議なこの現象は歴史家達の研究の的にもなる。

そう……。

皇帝ユリアヌスは勝利した。

敵指揮官（らしき男）の首を打ち取り、蛮族の一群を逃げ散らせたのだ。

……ユリアヌス自身は無我夢中で『気が付いたら、誰かの首級くびを掲げていた』という有り様だった。しかし、共に敵陣突撃したトゥルートに覚えがないという（何人か斬り殺した記憶はあるらしいが）。他の兵士に訊ねても、何故か皆一様に全力で否定していた。となれば、やはりユリアヌス自身の仕業だろう。

当人は顔面蒼白で『いや、指揮官の仕事というのは、それこそ、味方の指揮でね……。敵の大将を打ち取るのは兵士の仕事であって……。』とかブツブツ言っていたが、トゥルートも疲労困憊だったのでよく覚えていない。

ただ、味方の陣地に帰還した時の光景はよく覚えている。

その時、サルステイウスが高らかに宣言する。

「我らが【皇帝カエサル】フラウイウス・クラウディウス・ユリアヌス様に敬礼！」

そして、兵士たちは命令ではなく、自身の誠意に従って、敬礼を行ったのだ。

それは英雄誕生の瞬間だった。

あの日、現実を嫌うだけだった少年は、この日、現実を打ち砕く青年になったのだ。